

津波に奪わせない

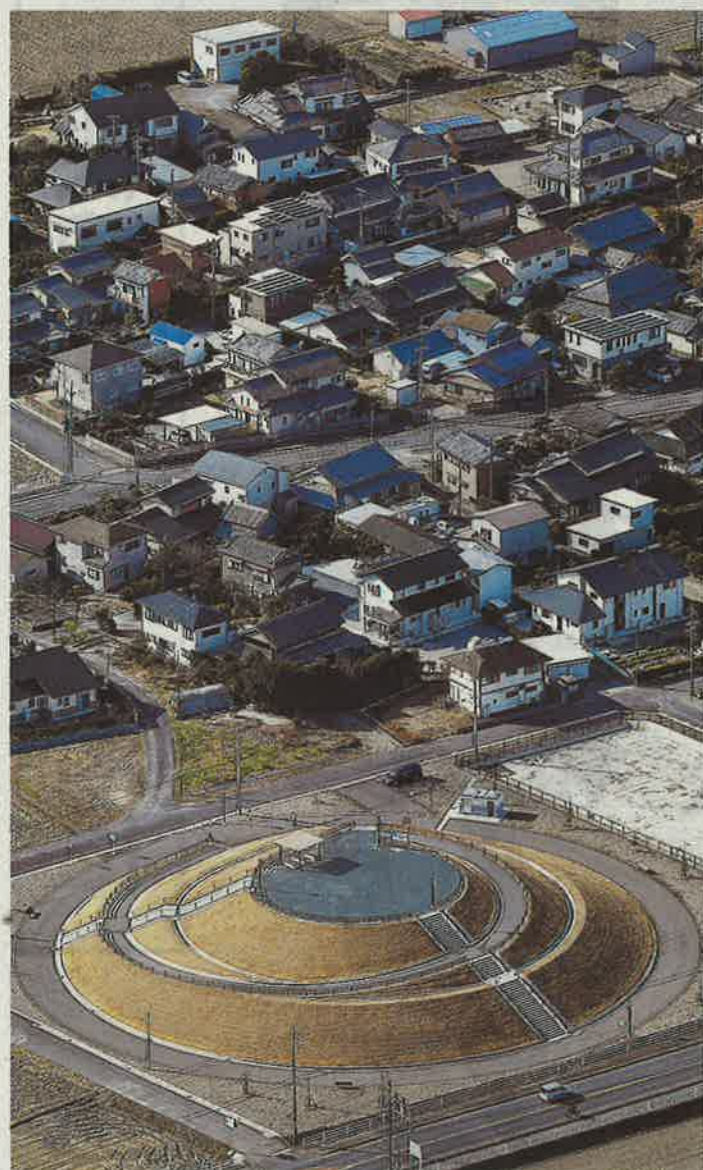
まもなく阪神・淡路大震災から23年、東日本大震災から7年。南海トラフ巨大地震が発生する確率は「30年以内に70%」と言われている。予想される大災害に、命を守る取り組みはどれだけ進んでいるのだろう。日本各地で、津波への備えを追った。



高知

高知県室戸市の都呂地区には、崖地を利用したL字形の「津波シェルター」がある。奥行き33枚の横穴は二重扉で防水され、71人を収容。高齢化率約5割の集落と高低差はなく、避難しやすい。縦穴部分の高さ23・9枚のらせん階段を上げれば、崖の上に出られる。

(井手さゆり)



静岡

静岡県袋井市は、避難用の高台「平成の命山」四つを整備した。本社ヘリから見ると古墳のような形で、標高10mの頂上には、計2300人が避難できる。江戸時代に考案された人工の山「命山」にヒントを得たもので、普段は公園として使える。

(水野義則)



大 阪

堺市堺区の信貴造船所で、津波救命艇の製造が進んでいる。最大で25人が乗れ、静岡、愛知、高知県では、すでに駐車場などに設置されている。シートベルトがついた座席やトイレがあり、1週間分の水や非常食を積むことができる。

(水野義則)



岩手

地表から約8mの防潮堤に囲まれた岩手県大船渡市の門の浜漁港。東日本大震災時の津波は16・5mで、防潮堤の高さは、数十年から百数十年に1度の割合で起こる津波を想定している。住民からは歓迎する声もあれば「海が見えない」と反対する声もある。

(福留庸友)